

問師の解行分別

土川澄賢

解^ル解^ラ之^ヲ解

行^ル解^ラ之^ヲ行

解^ル行^ラ之^ヲ解

行^ル行^ラ之^ヲ行

の四句は、導師が建立の「一家の學則」と稱せらるゝ散善義の文^①

行者當^ニ知^ル若^{クハ}欲^ク學^ブ解^ラ從^テ凡^ソ至^リ聖^ニ乃^チ至^リ佛^ノ果^ニ一切^ノ無^礙皆^得學^也若^{クハ}欲^ク學^ブ行^ラ者^必藉^ニ有^縁之^法少^ク用^ニ功^勞多^ク得^レ益^也

について、傳通記に「解廣行別」と釋せるを再釋する問師の解行分別である。即ち綵鈔の文は、^②

今私思^フ之^ヲ、若^{クハ}解^ラ解^ラ之^ヲ解^ラ自^ラ他^ニ共^ニ廣^ク學^{ナリ}、若^{クハ}行^ラ行^ラ之^ヲ行^ラ自^ラ他^ニ共^ニ別^ク行^{ナリ}、今釋^ス此^ノ意^ニ耳^ヲ、若^{クハ}解^ラ行^ラ之^ヲ解^ラ行^ラ共^ニ別^ク行^{ナリ}妙^ク解^ラ妙^ク行^ラ此^ノ意^也、若^{クハ}行^ラ解^ラ之^ヲ行^ラ通^ク漫^ク無^ク所^レ著^ス

となつてゐるが、その所説を考察し、更に十八通に明示する解信の四句説^④

解、解因分、因分

解、信因分、果分

信、解果分、因分

信、信果分、果分

に準據して、さきに擧ぐる如く私に配列したのである。

二

正しく四句の所説について述べん。決疑鈔①に「解スルヲ教ヲ曰レ解ト」と云ひ、綵鈔②に「解ニ於レ法相ヲ名ヲ爲ニ之ヲ解ト」と云ふ。教と法とは能詮所詮の別のみ。宗宗談異の教法を解し、目に即して見るべき千差萬別の法相を解するは、是れ第一句である。「進ルヲ趣ニ所解ニ曰レ之ヲ爲レ行ト」③と。解行は一雙、函蓋箭鋒なるを以て、行も亦數塵沙を越ゆ。而も通漫に雜修して所著なく、所謂「知境」を脱し得ない。是れ第二句。

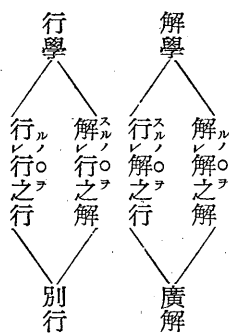
以上兩句は解學にして、「廣解」を勸む。

第三句は「解」と云ひ、「行」と云ふも、妙解妙行であり、各自所愛所求の一門、隨緣起行自他各別の一行を專修する。所謂「信境」に到達せるものである。

かくて第四句に至つて、千波萬浪の義路分別の跡全く無き大信大行となる。

第三第四兩句は行學にして、別行を修す。

即ち四句は左圖の如くである。



解と行は對立分離せるにあらずして、解行互に前後となり、解即ち行を起し、行即ち解を長す。

三

共に解と名くも、第一句は「解解」であり、第三句は「行解」である。解解は「但解」にして「衆生悟解」であり、畢竟抽象的觀念知である。行解は妙解にして、信の確立であり、「信知」、「佛智」である。

解の義に就いて、直牒には「師仰云」とて寂慧見聞の文を引いてゐるが、些か字句に相違あるを以て兩者を並舉すれば、

決疑鈔見聞卷三

決疑鈔直牒卷八

解行者師仰云此二意有、一義如散善義、三、一義云、
 解教文解……(中略)……

尋云解行眞實者所レ言解爲ニ安心ニ唯學ニ教文ニ爲レ云

尋云解行眞實者所レ言解爲ニ安心ニ將爲ニ教文學解云

レ解如何

答抄解レ教云レ解云ニ是教學云レ解也爾者

答鈔八十丁教解云ニ是教學解云然者

安心解聞タリ

安心外聞

但解如即眞實心具學時即眞實具也如レ此得レ意解處

但如レ解即眞實意具學時即眞實具也如レ此得レ意解處

可レ具ニ誠心ニ也

誠心可レ具也

但若解外修行時安心具云行所可レ攝誠心ニ也

若解外修行時安心具云行處安心可レ攝也 以上 師仰

の如くである。見聞に「安心解」とあるを直牒には「安心外」とする。安心の義について、両者が見解を異にせしか、或は何れかの寫誤なるか調査研究すべきであるが、今はたゞ直牒に二の解を分別して居る事を示すにとゞめる。即ち「教學の解」と、寂慧の所謂「安心の解」とである。前者は解解であり、後者は行解である。

四

稱阿名故、名は春悅、迎蓮社來譽と號す。(安永六年酉六月廿四日寂)。師が安永癸巳(二年)十二月三日、傳燈の師なる妙譽定月大僧正の大祥忌にあたり、その領解を録したるものであると云ふ淨土解行報恩録に、「柔抄四十四相傳也」と註して、

一解レ解解若欲學解是也、二解レ行解若欲學行是也

と、問師の解行四句の第一句に解學、第三句に行學を配當し、更に

初解^ニ解^ニ解^ニ中亦分爲^ニ一、一教興、二教相

次解^ニ行^ニ解^ニ中亦分爲^ニ一、一宗旨、二宗義

と説いて、宗旨、宗義の二を第三句の所攝とする。教興・教相・宗旨・宗義に就いて「初三解後一行」なりと云ふ。

春悦は漢語燈の文を引いて、祖意は「解^{スル}解^ル」の教興教相の學問を誠め、「解^{スル}行^ル」の宗旨宗義の學問を勸むるにあり、又「少用^ニ功勞^ニ多得^ニ益^ニ」と勸示する導師の意も行學にあるとなし、

一家^ノ學人^ハ是^レ斯^ニ爲^ニ學^ニ則^ト以^テ應^レ親^ニ古今章疏^ヲ者也

と喝破して居る。

五

抽象的推理的思惟に慣らされ、行を説いて行の觀念論に墮するの學的態度は近來學者の陥り易きところである。近頃淺見の徒、抽象的分析知を弄し、幾くもなき凡智を以て侵すべからざるを侵し、解解を以て自己の佛・自己の神を造成し、その同異を論ず。

宗義は行學の所攝、信境にあるもの行解を以て論ずべきのみ。解學知境に低迷する徒輩の氣儘に神佛を相諍はしむるは、佛智・神智の慳笑を招くのみ。

嚴然たる實踐的事實を無視して抽象知を弄する學者の一考を促す。

- 註① 觀經散善義卷第四(淨全二59)
 ② 傳通記第一(淨全二320)
 ③ 傳通記糝鈔卷第四十四(淨全三960)
 ④ 教相十八通卷上(淨全十二741)
 ⑤ 決疑鈔卷第三(淨全七271)
 ⑥ 傳通記糝鈔卷第二十三(淨全三517)
 ⑦ 傳通記糝鈔卷第二十三(淨全三517)
 ⑧ 傳通記糝鈔卷第四十三(淨全三936)
 ⑨ 教相十八通卷上(淨全十二738)
 ⑩ 教相十八通卷上(淨全十二740)
 ⑪ 決疑鈔直牒卷第八(淨全七568)
 ⑫ 決疑鈔見聞卷第三(淨全七418)
 ⑬ 嵯峨正定院藏本と太田大光院藏本と二本参照。

參考書

- ① 村上 專精 佛敎統一實踐論上卷、五二頁
 論第五篇 實踐論上卷、五二頁
 ② 渡邊 海旭 「理智より信仰へ」(壺月全集下
 卷三六二頁)
 ③ 紀平 正美 「知應の形式と行應の形式」(國民精神文化 第六卷 第五號)
 ④ 川合 貞一 「思惟の二つの方向」(國民精神文化 第七卷 第一號)
 ⑤ 金子 大策 「道」(國民精神文化 第七卷 第一號)
 ⑥ 伊東 延吉 「學問の研究について」(國民精神文化 第七卷 第八號)